瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば
年間第三十三主日Ａ年（２０２６年１１月１５日）

主任司祭　小西　広志

第一朗読：箴言３１章１０－１３、１９－２０、３０－３１節
第二朗読：テサロニケの信徒への第一の手紙　５章１－６節
福音朗読：マタイによる福音書２５章１４－３０節

三つの朗読から

第一朗読での「有能な妻」とは神の知恵のことです。有能な妻は働き、幸せをもたらします。同じように神の知恵も働き、幸せをもたらしてくれます。有能な妻をほめることは、神の知恵をほめたたえることなのです。第二朗読に従えば「主の日」は必ずやってきます。暗闇にいる人にとってはその日は突然やってくるものです。しかし、わたしたちは「光の子」ですから、その日が突然やってくることはないのです。

福音朗読の１５節にある「タラントン」ですが、１タラントンは６，０００ドラクメと等価です。１ドラクメは１デナリオン（ローマの銀貨）と等価で、１日分の賃金に相当します。１タラントンは１６年分の賃金となり莫大なお金であることがわかります。「預けた」ことに注目しましょう。どのように使うべきかの指示はされていません。それほど、主人は僕たちを信頼しているのです。

続いて１８節に「隠した」と記されています。他の二人の僕たちが多額のお金を預けてくれた主人の信頼に応えていったのに対して、この僕は主人の財産を損なわないために埋めてしまいます。当時、預かり物を埋めて隠し、もし、それが盗まれたとしても賠償する義務はなかったそうです。この僕は主人が信頼して預けたという事実を忘れ、ただ、主人からのものである財産を守ることだけを考えたのでしょう。

２０－２５節にある「預けた、もうけた」に注目してください。５タラントン、２タラントンもうけた僕たちのことばの中には「預けた」と「もうけた」の対が見られます。しかし、第三の僕にはそれがありません。「もうける」の原文はケルダイノーで「手に入れる、得をする」の意味です。第三の僕は主人が大金を預けたことの真意、つまり僕への信頼が分からないのです。それどころか、「恐ろしくなり」と、主人に対する恐れ、不安を抱いています。

ひとこと

今日の三つの朗読からテーマを取り上げるとしたら「神さまとの信頼関係」といえるでしょう。第一朗読には「有能な妻」とあって、妻が神の知恵を暗示しています。神さまはご自分からでる知恵（神の知恵）に全幅の信頼を寄せています。知恵もまた、その信頼に応えていこうとします。１１節にある「夫は心から彼女に信頼している」は男性のわたしにとってはこころに響くことばになります。

第二朗読で味わいたいのは５節にある「あなたがたはすべて光の子」という一節です。洗礼によってキリスト者は光の子とさせてもらいました。光の子は自分で光るのではありません。「光からの光」（ニケア・コンスタンチノープル信条参照）である主キリストの光を輝かせるのです。「光の子」らしく生きるようにと父である神さまはわたしたちへの信頼を込めて御子イエスさまをこの世へと送ってくださったのです。

福音朗読に見える、信頼する主人と、それに応えていく僕たち、応えられない僕についてはすでに指摘しました。神さまに従って生きていくとは、神さまの「信頼」に従って生きていくことに他ならないのです。

神さまがわたしたち一人ひとりを信頼しているのはどこで分かるでしょうか。第一朗読に則して考えてみたら、「人生の知恵」を神さまからいただいたことが他ならない神さまの人間に対する信頼を表していると思います。「人生の知恵」ばかりではありません。「信仰」も、「能力」も、「性格」も、そして「いのち」すらも神さまからいただいたもの、与えられたものです。神さまからの一方的な人間への信頼の中で、わたしたちは生きてゆくのです。

この事実は時にはわたしたちにとって重いものです。一人ひとりをかけがえのないものとして信頼してくださるのは、重荷にもなるでしょう。「恐ろしくなり」という僕の気持ちは分からないでもありません。しかし預けられたものを「地中に隠して」しまうのは残念な気もします。

１１月は死者の月であり、終末の月です。今日の朗読箇所は一読したところで終末との関わりは見いだせないかもしれません。しかし、神さまとの信頼関係の中で「今」を生きる。そして与えられた「知恵」を「いのち」を「隠して」しまうのではなく、精一杯生きることこそ終末を生きることなのです。終末とはこの世の向こうにあるのではなく、「今」、「ここに」生起するものなのです。